

2011年の東日本大震災の時のことです。東北地方だけでなく、関東地方も大きな揺れに見舞われました。当時、関東に111店舗を展開するヤオコーの店も少なからず被害を受けました。液状化の被害に遭った店もありましたが、休みの従業員までもが店に駆けつけてくれました。一丸となって泥をかき出し、地震の次の日もなんとか店を開けることができました。

多くのお客様からは感謝の言葉をかけてもらったと聞いています。災害時にこそ、食品スーパーのありがたさが改めてわかります。普段は小売業という業界について、政治家もお役所の方も重要な産業として大切にしてくれませんか。私どもの携わる食品スーパーは、お客様の食事という生活シーンのためのワンストップショッピングの場です。主には食事の材料ですから、人々の命にも関わります。ただ単純においしいものを取り扱うだけではなく、命をつなぎ、健康に役立つことが私たちの大切

～HISTORY～ 暮らしを変えた立役者



かわの・ゆきお 1942年生まれ。66年東大法学部入社。74年専務、85年社長。2007年に会長に就任。09年からは食品スーパーの業界団体の日本スーパーマーケット協会の会長を務める。

食品スーパー輝かせる

母と協力し、店を全国区に

な役割です。

ヤオコーは埼玉県中部の小川町を発祥とする食品スーパーです。



クッキングサポートでは毎日の献立アイデアを調理しながら提案する

は母のトモの功績です。私は母と手を携え、従業員の皆さんと力を合わせて埼玉県を代表する企業に、さらには全国の食品スーパーを代表する企業に育ててきました。しかし、実力はまだまだです。

れない出来事がありました。支えているのは、地元の高校を卒業した新卒の女性が八百幸商店に入ってくれました。ところが、その女性のお母さんが、「うちの娘は高校まで出てどうして八百幸なんだ」と嘆いたという話を人づてに聞いたのです。本当の話かどうかは分からないですが、スーパーの経営者として、すごく悔しかったのを覚えていて。悔しいし、悲しくもなりました。残念ながら、そう言われてしまうくらい小売業の社会的な評価は低いのです。この時の悔しき、悲しさがその後の私の努力や頑張りにつながりました。電子商取引（EC）サイトの台頭や、10月に控える消費増税など、小売業を取り巻く環境は厳しいと言わざるをえません。しかし、お客様の生の声を聞き、それを接客や商品に生かせる小売業の面白さは、まだまだ世の中に知れ渡っていないのではないのでしょうか。小売業ほど楽しいビジネスはありませぬ。その面白さを私の半生とともに伝えていくつもりです。

今、息子の川野澄人社長に経営を任せています。お父さんが創業されたヤオコーに入社して2、3年たった1970年ごろに忘れら

日経MJ 2019年4月10日掲載